



Finland Artists' Studio Foundation アーティスト・レジデンシー交換プログラム 2018

目次

- I. 「コラボレーションと将来の展望」 | リイカ・スオミ-カンデ
- II. 「FASFとの交換」 | 村田弘子
- III. 2018年交換プログラムの概要
- IV. 活動エッセイ
 - 1. 「Lure, Decoy, Camouflage」 | 狩野哲郎
 - 2. 「遊工房での滞在制作」 | アンティ・ニューソラ



コラボレーションと将来の展望

リイカ・スオミ-カンデ / FASF

2016年、嬉しいことにFinnish Artists' Studio Foundation (以下FASF)は遊工房アートスペースとアーティスト交換の協定を結びました。

フィンランドのアーティストの間で、近年アジアへの関心が高まっており、遊工房アートスペースとのパートナーシップは我々のレジデンスプログラムを豊かにすると共に、地理的にも一層多様にしました。国際的なレジデンスプログラムのネットワークResArtisを通して、AIR活動を展開する上で活発な役割を果たし、アーティストを温かく迎え、快適な施設を提供していることが伺えたので、遊工房アートスペースとの協働を望みました。

交換プログラムにおいて、FASFは5月～6月にヘルシンキにある Project Studio Artsu にビジュアルアーティストの狩野哲郎迎えました。プログラム終盤、彼はスタジオでオープンスタジオと展覧会を開催しました。振り返ってみると、ビジュアルアーティストのアンティ・ニューソラは遊工房アートスペースに選ばれ、集中した活動期間の機会を得ました。

海外のレジデンスにアクセスしやすくし、アーティストのためにサポートされた環境で創作と研究を可能にするという背景から、アーティスト交換プログラムが重要であると考えます。遊工房アートスペースとの協力が続き、将来も両国のアーティストためになることを我々は望みます。

FASF

ヘルシンキに本部を置く FASFは、1990年に Finnish Artists' Associationによって設立された非営利のスタジオ提供組織です。手頃な価格でアーティスト・スタジオを管理し、ビジュアルアーティストに活動設備やスタジオ・アパートメント、住居などを提供します。2018年、FASFは入居者として300名ものビジュアルアーティストを抱え、フィンランドで15棟のスタジオ管理をしています。さらに、FASFは海外に2棟のスタジオを管理しており、1つはグラッシーナ（トスカナ・イタリア）、もう1つはマルベリャ（スペイン）にあります。毎年50名ほどのフィンランドアーティストがこれらのスタジオで1-3ヶ月滞在制作をしています。

FASFが運営する国際レジデンスプログラムは、アーティストに一層海外で活動する機会を提供するため、1997年に開始しました。FASFはケベック（カナダ）や日本など海外の類似する機関と共にアーティスト交換プログラム促進します。滞在アーティストはこれらのプログラムや時には公募などで選ばれます。フィンランドでは、FASFはアーティストとコミュニティに向けたレジデンス機会の情報や知識の収集・拡散の役割があり、ウェブサイトを設定しています。artinres.fi

2018年、通常はTapiola Guest Studioをレジデンスプログラム用に押さえているのですが、当時は改装中でした。そこで、今回はヘルシンキにある別のスタジオを提供することにしました。Project Studio ARTSUの施設は、アラビアンランタというパブリックアートや教育芸術機関がいくつかあることで知られる住宅地にある古い工場だったところです。都心に近く文化的魅力がある地区ではあるものの、森に囲まれた美しい湿地帯です。スタジオはビルの7階にあり、47 m2 の広さにキッチン・バスルームがあるプライベートな空間となっています。ARTSUの同じ階には長期で入居する地元アーティストのスタジオが他に8つあり、レジデンスアーティストを迎えたことで地元アーティストとの関わりに変化をもたらすことができました。

<http://ateljeesaatio.fi/english/index.html>



フィンランド・アーティスト・スタジオ・ファンデーション（FASF）との交換

村田弘子 / 遊工房アートスペース共同代表

遊工房は、アーティストの滞在制作・発表の場と機会として作家受入を継続すると共に、国内で活動するアーティストの派遣機会の創出について、AIR間の協働活動として都度実施している。その中の一つが、フィンランドの作家向け、スタジオの運営・管理団体のFinish Artists Studio Foundation（FASF）との交換プログラムである。

この交換は、2017年から始まり、2018年は2回目となる。1回目に派遣した吉田和生氏に続き、選考を通して今回の機会を狩野哲郎氏が獲得した。滞在施設は、FASFが管理運営している施設の中から、ヘルシンキ郊外の緑の環境に恵まれ交通の便も良好な、エスポー市のタピオラ・ゲストスタジオが派遣作家の滞在・制作先である。今年は、スタジオが工事中の為、例外的に狩野氏の滞在先は、ヘルシンキ市内のProject Studio Artsuとなった。彼は、そこで近年取り組んでいる生物の世界認識についてのリサーチと報告展を、5・6月の2ヵ月間の滞在中に行った。この時期のフィンランドは、長く暗い冬から解放され白夜の時期に向かい、人々は夏休みの準備で高揚している季節である。

一方、日本へは、遊工房の受入アーティストとして、フィンランドから、Annti Nyysolaが、2018年12月～2019年1月の2ヵ月間滞在制作した。Anntiは、同時期に遊工房に滞在していた、スロバキアやオーストラリアのアーティスト達との交流の機会や、トーク、展覧会のオープニングなどで、日本人アート関係者とも親しく交流した。狩野氏とAnntiには、遊工房で報告トークの場を作り、互いを認識した。

来年は、タピオラ・ゲストハウスでの滞在制作の機会が再開するだろう。改築後の様子を伺うのが楽しみである。

遊工房アートスペース

国内外のアーティストが一定期間滞在しながら制作する、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）と、在京作家向けスタジオや、作品を展示・発表する非営利ギャラリーを主たる事業とし、同時に、芸術文化を通じた地域活動を推進しています。「ユー（あなた・遊）」の「工房」として、アーティストの自律的な活動の支援を通し、多くの方に芸術文化を身近に体験できる機会と親しんで頂く場を提供しており、これまでに、約50カ国3000人の海外からのアーティストを迎え、250人を超える若手国内作家の展示発表や芸術文化交流の場となっています。（2019年3月現在）

<http://www.youkobo.co.jp>



2018年交換プログラムの概要



Youkobo



Artsu

日本からフィンランドへ

狩野哲郎・美術家

滞在期間：2018年5月1日～6月30日

展示：2018年6月13日「Lure, Decoy, Camouflage」

滞在制作の成果発表としてヘルシンキのArtsu project studioで開催。

フィンランドから日本へ

Antti Nyyssölä・美術家

滞在期間：2018年12月1日～2019年1月31日（パートナーAkuliina Niemiと共に滞在）

展示：2019年1月23～27日：「Antti Nyyssölä」

滞在制作の成果は遊工房にてオープンスタジオとして開催。

活動成果報告会

2019年1月25日に遊工房での展覧会会期に合わせ、両国参加作家及び多くのアート関係者の参加を得て開催された。尚、会では、並行して行っていたスロバキアとのAIR交換プログラムに参加した両国作家による報告会も実施した。



「Lure, Decoy, Camouflage」

狩野哲郎/アーティスト

2018年5月4日から6月30日までの間、本年度で2回目となる遊工房アールスペースとFinland Artists' Studio Foundationによるアーティスト・レジデンス交換プログラムにより初夏のヘルシンキ滞在の機会を得た。北欧諸国への渡航経験は今までなかったが、自分の近年の制作テーマである自然と人間の関係性について考える中で、漠然といつか行くかもしれないと思われる場所のひとつであった。このプログラムの公募が行われていた、2017年の秋頃、酷暑のアメリカ西海岸でのレジデンス参加を終えたのち、展覧会のための制作で雨季への変り目のシンガポール滞りが始まったところだった。

長い夏への反動のようなもので、その時には南国から北方でのいくつかのプログラムにアプリケーションを書き、幸運なことに夏のフィンランドと冬のノルウェーのレジデンスに参加できることとなった。いつか行く国で自分が見たかったものとは何かを確かめるための滞在は始まった。現地制作のインスタレーションや立体作品を中心とする自分のようなアーティストの場合、2ヶ月ほどのレジデンス・プログラムでは少なくとも2つのパターンがあるように思う。ひとつは展覧会の枠組みや規模が決まっていて、それに向けて事前に新作のプランや素材を準備し現地で制作をするパターン。もうひとつは現地でリサーチした素材から、作品やその手がかりをかたちにしこむパターン。今回は滞在中にオープンスタジオを開催するが、リサーチ中心の予定を組んだ。

近年取り組んでいる、生物の世界認識について想像するための自然物と人工物を使ったインスタレーションは様々な分野や領域の学説、知見、経験からインスピレーションを受けているが、今回のフィンランド滞在中において、特に関連性の強いテーマとして「渡り鳥のルート」と「狩猟文化」があり、これらに関連のあるところからリサーチをスタートすることとした。「渡り鳥のルート」については北方への滞在を決意させた動機のひとつで、鳥取で見た白鳥たちが日本海を沿って北海道、ロシアから北極圏へと至ること、そしてそのルートを先天的に知っていることへの憧れからはじまったものである。

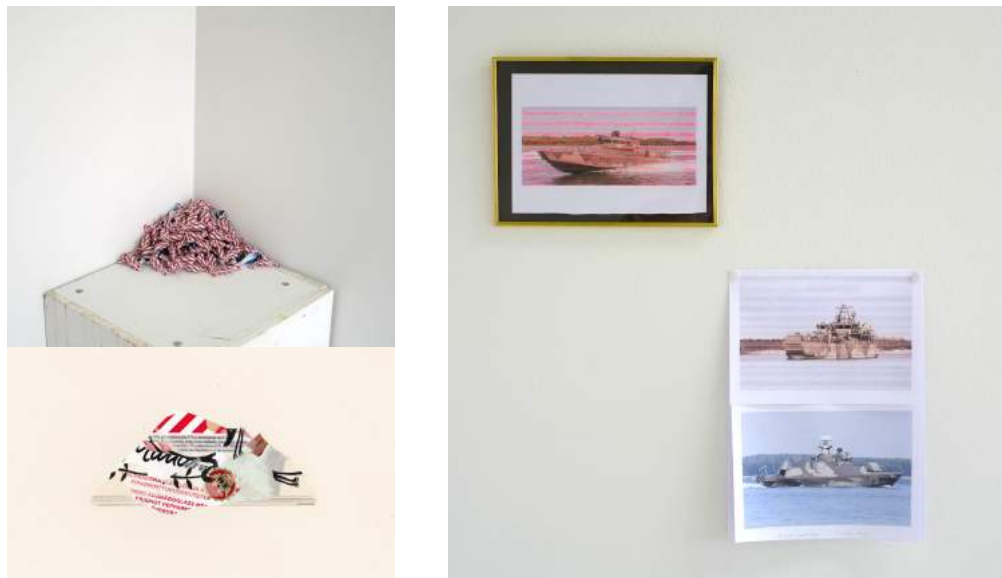
この事実はリサーチ対象としての水辺と湿地を自分が歩くことの原点となっている。港町と1000の湖の国がどのようなフィールドで、その国の人々がどう捉えているのかを知することは、荒野、山野、島の国の人々と比較する価値があるであろう。「狩猟文化」についての興味は、生物について考え始めた初期に自身で狩猟免許を取得し、猟師の知識と経験を調べ始めて以来の対象である。野生動物の生態に想像を巡らせる時、飼養動物のような飼い方の入門書や環境づくりのノウハウは極めて少ない。日本においては、獣や鳥を捕獲する際に「罠」や「網」も少なくなく用いられてきた。優れた罠は、動物に危険を察知させない、あるいは危険に優る魅力をもつものである。猟師によって蓄積、改良されてきた罠や網の形態や構造について知することは、動物によって知覚される人工物(自作における彫刻的なもの)と関係が深いと考えている。

フィンランドにおいてはハンティング、フィッシングが盛んであり、ヘラジカやトナカイ、アザラシやヒグマ、そしてサーモンのルアーフィッシングなど少し見渡すだけでも日本とは異なる状況であろうことも想像された。その中でも伝統的に用いられてきた疑似餌(ルアー)や罠による水鳥狩(デコイ)をリサーチの起点として設定した。ルアー及びデコイは使われ始めた当初は猟師/漁師自身が木材を削り、形態を検討し制作された。動物によってより知覚されやすい人工物をつくるという意味において自作とも通ずるところがあり、興味深いものであった。また、狩猟の方法は原始的なものに遡るに従って異なる地域でも似通っている事が多いが、動物相の違いにより、自ずと狩猟対象やフィールドに最適化された方法へと独自化される。これは、現在世界中で有名メーカーのプロダクトが流通している状況では見落としがちだが、ヴィンテージ品(プロダクトがローカルだった時代のもの)を現地調査で参照することによって、見えやすくなることへの期待もあった。以上が事前に設定した調査対象である。同時に、それらの調査の過程である種偶発的に出会うことになるものごとも、レジデンス・プログラムに参加するにあたって重要なチャンスとして考えている。直感的に興味を持てることへの積極性を持ち、それに従うことで事前に設定できなかった、未知の題材の獲得へとつながること期待して行動している。



迷彩柄(カモフラージュ)は現地で見つけた題材の一つである。 迷彩技術はソナーやレーダーなど近代的な索敵・測距技術が開発される以前の時代に、目視および光学視差式距離計(レンジファインダー)に対する幻惑を目的として研究された。特に100年ほど前にイギリスで研究されたダズル迷彩は変則的な幾何学模様を配置したもので、錯視の効果によって距離を誤認させるといった理論のもので、幾何学的抽象に連なるものと捉えられる。フィンランドでは公園や林の中の歩道を歩くなかで、時代を問わず建造物や人工物が木々の間に非常に馴染んでいた印象があった。それを設計する人々の日常的に持っている色彩感覚の違いなのかどうか調べているうちに、現在フィンランド軍に採用されているM05迷彩というパターンにたどりついた。M05迷彩はフィンランド森林研究所の森林写真のアーカイブとVTT技術研究所の解析によって開発されたもので、それは言ってみればフィンランドの森林全体の現代の抽象画のようなものであるとの印象も受けた。そこにいる人々と動物の日常的に見ている色彩の幅を知ることが、滞在によって得られた収穫の一つであった。

自身が事前に期待した結果を回収することにのみにこだわらず、柔軟性を失わないようにすること。調査目的に最短距離で向かうことは、限られた期間の調査において効率的ではあるかもしれないが、寄り道を厭わないことで見つけれられることもある。「公園で老婦人がカモメにパンを撒いている」ことを見た時にそれが食パンの耳でもなく、ブリオッシュでもなく、固くなったバゲットでもなく、ライ麦パンであることに気づくためには「スーパーで注意深く好奇心を持って買い物をし、フィンランド風のサンドイッチを作って食べる」という経験が必要である。そういった経験は自分の持っている尺度との違いや共通項を想起させて、2ヶ月の間気づきを与え続けてくれた。そしてまた、僕がライ麦のパンを食べた時にフィンランドのことを思い出すきっかけとなるだろう。



狩野哲郎

1980年宮城県生まれ。東京都在住。2005年東京造形大学造形学部デザイン学科環境デザイン / 都市環境コースを卒業した後、2007年に同大学院造形研究科美術研究領域修士課程 / 絵画コースでMFAを取得。2011年狩猟免許(わな・網猟)取得。狩野は、既製品や種子・果実といった植物を組み合わせることで、空間へのドローイングとしての新しい「風景」を造り出してきました。2009年から取り組んでいるインスタレーション「自然の設計/Naturplan」では、時に作品の中に野鳥が入りこみ、人間にはコントロール出来ない「他者」が内包されます。こうした狩野の作品世界では、モノや空間があらかじめ持っていた意味や機能から逸脱して扱われることで、人間にとっての価値観や認識方法が宙づりにされ、普段、私達が意識することのない新たな知覚や複数の世界認識の存在を想像させます。狩野はこれまで、滞在型制作のプロジェクトを中心にインスタレーション作品を展開してきましたが、それと並行して、マスキングテープなどを用いた平面のドローイング作品や既成品のアッサンブラージュ、鋳込み成形による磁器、キャストガラスなどを組み合わせた立体作品も制作しています。それらの作品は個々の「造形物としてのあり方」を意識して制作されながら、同時に「他者」のための「風景」としてのインスタレーションの部分となり、新たな世界認識を示唆することでモノや場所の意味や価値を問い続けます。

「遊工房での滞在制作」

アンティ・ニューソラ/アーティスト

2018年12月から2019年1月にかけて、遊工房に滞在した。私は大きなスタジオと小さな居住空間を与えられ、結果としてこれが私にとって最適であった。都市では、あちこち見て歩くのに公共交通機関で数時間かかることもしばしばあり、家で制作ができるのは安心した。近所へは、遊工房の自転車で簡単に移動できた。レジデンスのスタッフは親しみやすく、助けとなり、遊工房での創作を快適なものとしてくれた。また、同時期滞在していたオーストラリア人とスロバキア人のアーティストや、レジデンススタッフが紹介してくれた日本人アーティストとも親しくなることができた。

滞在中、私は主にミクスドメディアの手製本アーティストブック制作に集中した。街がとてもきれいなので、道端で見つけたのは店前の空の段ボールくらいであった。素材が限られていることで、私は何が利用できるかということ在必死で探した。そして段ボールは、以前も利用したことのある粘着テープ、防水シートなどの梱包材と相性がいいということに気づいた。また、私の作品において低級、高級、あるいはサブカルチャーの混合で繰り返されているテーマにも合うのであった。滞在中の主な作品は、大型のアーティストブックだった。わずかにニュアンスの異なる茶色のダンボールは伝統的な和紙と組み合わせられた。和紙がこのような本に用いるのに理想的であることがわかった。私は地元のワークショップで紙漉きのやり方を学び、残ったものを家に持ち帰った。

現代美術館で最も印象的だったのは森美術館とICCセンターである。そこで私はこれまでで最も先端で興味深いVRの作品を見た。しかしながら、自身の作品のために、私は他分野や古美術の美術館にもよく訪れた。日本の工芸美術館、太田美術館、サントリー美術館、盆栽博物館、盆栽村や小さな風博物館は最もインスピレーションを受けた。東京近郊の山や寺院へ数日の旅行もした。

私はオープnstudioも開催した。そこで、再利用されたあるいは見つけた素材から構成される様々な作品を発表した。オープニングでは、地元関係者に加え、フィンランドセンターの人々にも会った。オープニングの後展示は4日間公開された。遊工房での滞在は創作意欲をかき立て、実りあるものであることがわかった。また、この経験は私の作品にとって将来に亘っても好影響を及ぼすと信じている。この機会をもたらした村田夫妻と遊工房スタッフ全てに感謝を述べたい。



アンティ・ニューソラ

アンティ・ニューソラは伝統に基づく絵画作品を制作するフィンランドのアーティストである。しかし、切り取った物や防水シート、粘着テープ、シール、紙など、様々な異なる種類の日用品を用いて、作品を作る。選んだ材料は部分的に作品の文脈を形成し、視覚モチーフへと導く。崇高で高貴なテーマは、低級あるいはカウンターカルチャーから精通する美学を利用しながら扱う。作品は抽象と表象、絵画と彫刻の間にある、あるいはそれらが共存したものである。